

2 一・二年草および宿根草類による景観形成 (播種後2年目までの状況)

ねらいと成果

2000年3月に淡路公園島憲章が制定され、花きを中心とする景観形成技術の開発が求められている。草花による大規模な景観を低コストで省力的に創出するために、緑化用草花として利用される一・二年草および宿根草39種の混合種子を3段階の密度で播種し、放任状態での生育、開花状況を調査した。

その結果、1年目は一・二年草の開花が早く、5～6月に開花面積が大きく、宿根草の開花は5月からで、6～7月以降にピークがみられた(図1, 2)。2年目はいずれの播種密度でも一年草の開花面積および開花草種が激減し、宿根草が主体になった(表)。

内容

アリッサムなど一・二年草16種とオオキンケイギクなど宿根草23種、計39種の混合種子を、2002年9月24日に1㎡あたり0.75g(標準の0.5倍区)、1.5g(標準区)、3g(2倍区)の3段階の播種密度で直播した。各区10㎡(1m×10m)とし、1m×1mの区画3カ所についてその両側0.5mを含めて開花期、開花面積等を毎月2～3回調査した。

①1年目(10月～翌年9月)の状況：いずれの播種密度でも宿根草に比べて一・二年草の開花が早かった。2倍区ではアリッサムが花の少ない時期である12～1月に60%程度の高い開花面積となった。翌春以降の一・二年草は、5～6月をピークとして開花種類数が多かった。開花面積10%以上の種類数は0.5倍区6種、標準区7種に比べて2倍区は3種とやや単調化した。

宿根草は翌年5月から開花がみられ、種類数は0.5倍区、標準区では6～7月にピークがありその後漸

減したが、2倍区は10月のピークまで漸増した。占有率10%以上の種類は0.5倍区、標準区は3種、2倍区は2種と一・二年草に比べて少なかった。

②2年目の状況：一・二年草はいずれの播種密度でも激減した。一・二年草の最大開花面積は4.2%(2倍区の5月)にとどまり、開花種類数も1年目の16種中15種から、9種に減少した。

宿根草は0.5倍区で開花面積が小さかった。主な開花期は4月のカワラナデシコから始まり、開花面積が大きいのは7～8月のセイヨウミヤコグサであった。開花がみられた宿根草は1年目の15種から、2年目は17種とやや増加したが、開花面積は1年目よりやや小さくなる傾向がみられた。

2年目までの調査で、一・二年草は1年目の景観形成が主な役割であり、2年目は宿根草が主体になること、アリッサムの播種密度を高めると播種後の秋～冬の花のある景観形成を効果的にできることが明らかになった。

今後の方針

今後5年目まで調査を続け、草種間の競合や植生の安定性を把握し、花による景観形成のための一・二年草および宿根草のより効果的な利用法を検討する。

岩井 豊通 (淡路農技・農業部)

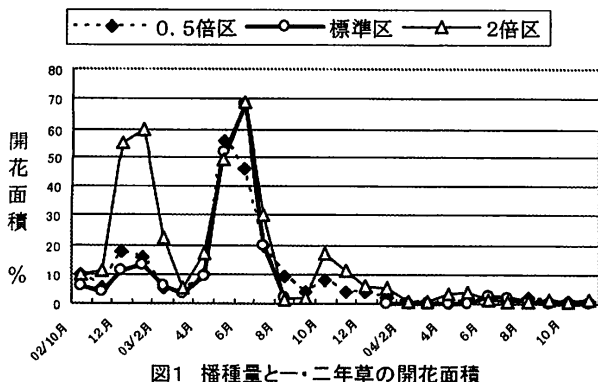


図1 播種量と一・二年草の開花面積

表 標準区の開花面積上位5種

	2003年	2004年
宿根草	1 キハナヒキソウ(23)	セイヨウミヤコグサ(58)
	2 ルドベキア(23)	オオキンケイギク(13)
	3 カワラナデシコ(12)	フランスギク(7)
	4 セイヨウミヤコグサ(5)	セイヨウコキリソウ(白)(6)
	5 セイヨウコキリソウ(白)(4)	ジギタリス(5)
一・二年草	1 ヤグルマギク(49)	ハルシャギク(7)
	2 オオマツヨイグサ(23)	ムシトリナデシコ(0.4)
	3 ジャーマンカモミル(16)	ジャーマンカモミル(0.2)
	4 アリッサム(13)	タマザキヒメナシ(0.2)
	5 ヒナゲシ(13)	アリッサム(0.1)

( )内は最大開花面積(%)

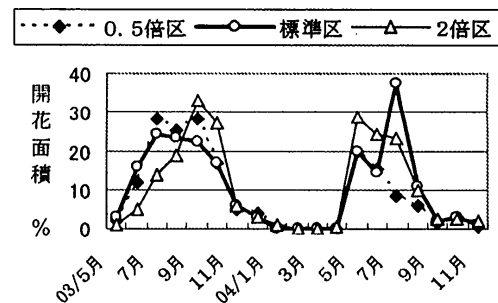


図2 播種量と宿根草の開花面積